HamaMed-Repository
浜松医科大学学術機関リポジトリ
浜松医科大学
Hamamatsu University School of Medicine

Fetal myocardial tissue Doppler indices before birth physiologically change in proportion to body size adjusted for gestational age in low-risk term pregnancies

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2018-09-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関井, 克行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003414

論文審査の結果の要旨

本論文では、胎児の出生前心筋組織ドップラー指標と在胎期間補正を行った体格との関連性を検討した。在胎 37 週から 41 週の単胎妊娠のうち、出生前 3 日以内に胎児心臓超音波検査を施行し得た被験者を対象とし、体重パーセンタイルを基に、AGA(appropriate for gestational age)群 50 名、SGA(small for gestational age)群 10 名、LGA(large for gestational age)群 16 名の 3 群に分類された。心筋機能評価の指標として、心室中隔、僧房弁輪部(左室側壁)および三尖弁輪部(右室側壁)における長軸方向心筋運動速度波形と総合的心機能指標である myocardial performance index(MPI)を測定した。

胎児心臓の三領域における収縮期心筋の最大運動速度は、AGA 群に比して LGA 群において有意に高値($p<0.05$)であり、SGA 群において有意に低値($p<0.01$)であった。収縮期心筋の最大運動速度は、出生体重と有意に相関($p<0.001$)したが、在胎期間とは相関しなかった。また MPI は、心室中隔において、AGA 群に比して SGA 群において有意に高値($p<0.001$)であり、LGA 群において有意に低値($p<0.001$)であった。さらに MPI は、三領域において、出生体重と強く逆相関($p<0.001$)したが、在胎期間とは相関しなかった。以上より、胎児における心筋組織ドップラー指標は、在胎期間補正を行った体格に応じて変動することが本研究によって明らかとなり、胎児の心機能評価は在胎期間ならびに胎児の体格を考慮した基準値に基づいて判断することが望ましいと考えられた。審査委員会は、本研究は、低リスク妊娠満期の胎児において出生前心筋組織ドップラー指標と在胎期が補正を行った出生体重との関連を評価した初めての報告であることを高く評価した。

以上により、本論文は博士（医学）に学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者　主査　　林　秀晴

副査　　椎谷　紀彦　　副査　　渡邉　裕司